国立故宮博物院蔵『山西辺垣図』および『山西三関辺垣図』と京都大学蔵『山西辺垣布陣図』との比較

田中和子
木津祐子

はじめに

本稿では、前稿〔1〕に引き続き、『山西辺垣布陣図』に関する調査報告を行う。二〇一〇年の春から、類似する絵図の所在調査に着手し、六月、十月、および、十一月と三回にわたり、台北の国立故宮博物院ならびに中央研究院で調査を行った。その結果、『山西辺垣布陣図』に極めてよく似た内容の古地図が国立故宮博物院に所蔵されていることが判明し、資料の収集や分析を始めたところである。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第一章では、台北での調査に至る経緯と三回の調査内容を報告するとともに、国立故宮博物院蔵の『山西辺垣図』および『山西三関辺垣図』に関する書誌などの基本情報を木津が整理し、考察を加える。第二章では、これら『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』、京都大学蔵の『山西辺垣布陣図』に含まれる図幅群の内容、共

通点と相違点、描かれている地理的領域、各図幅の配列構成などについて、田中が報告する。最後に、今回の一連の調査で得られた成果を踏まえて、今後の研究の見通しと課題を示す。

第一章　国立故宮博物院所蔵『山西三関辺垣図』『山西辺垣図』の来歴

京都大学蔵『山西辺垣布陣図』（以下『布陣図』と略称）については、『京都大學文學部研究紀要』四九号（二〇一〇年三月）において、その予備的考察を行い、そこに描かれる燉台や城関の布陣状況が、明の崇禎十年（一六三七）以降、清の順治年間（一六四四～六一）以前の山西鎮三関一帯の長城沿線を示すものであろうとの推測を行った。

その後の調査により、李孝聡二〇〇七[2]に紹介される『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』が、『國立中央圖書館善本書目　増訂本』（一九六七年）に著録されるものと同一で、その図幅の大きさから考え、本学『布陣図』と極めて近い関係に有るのではないかとの知見を得た。同地図は、現在は台湾の国立故宮博物院の所蔵であるため、二〇一〇年六月と十月、十一月と三度にわたり国立故宮博物院を訪問し、当院図書文献処の協力のもと、所蔵の『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』のマイクロフィルム、さらに図書文献処保管の画像を閲覧する機会を得ることができた。その調査の結果、本学所蔵の『布陣図』がこの二組の地図群と由来を同じくする地図であることが判明したのである。残念ながら、国立故宮博物院の上記二組の地図群は破損が著しく、現品を閲覧することが現時点では不可能で、詳細な比較検討は他日を期さねばならない。しかしながら、『布陣図』と同じ源流を有する地図群を発見し得たのは極めて大きな収穫であった。これにより、本学所蔵図に

欠落していた図幅の枚数と、それが本来どの領域を覆う地図であったのか等、その本来の構成についてもほぼ確かな実態を確認することが可能となった。

『布陣図』の本来の構成についての考察は、第二章における議論に譲ることとし、本章では、国立故宮博物院蔵『山西辺垣図』及び『山西三関辺垣図』に関する書誌情報に関する分析と、台湾中央研究院傅斯年図書館と東洋文庫にて調査した文献資料による分析を軸に、本地図成立の背景に関してその梗概を記述することとしたい。

第一節　『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』の著録と現蔵地図の比較

台湾の国立故宮博物院所蔵『山西辺垣図』及び『山西三関辺垣図』は、もと京師図書館の清内閣大庫旧蔵輿図であり、下に紹介する通り、そもそもは巡按山西監察御史から朝廷に献上された進呈図としての由来を有する。京師図書館が国立北平図書館と改名した後、当時の同図書館輿図部主任であった王庸の手により、一九三二年に大規模な修復と目録作成が実施され、その成果は、まず『國立北平圖書館館刊』第六巻第四号に、さらに一九三四年には『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』として同図書館から公刊されている。現時点でこの目録掲載の提要が、これらの地図群に関する基礎的な書誌資料となる。いま、この目録に基づいて地図の来歴を確認し、併せて現蔵地図の分類巻立てとの比較対照を行うこととする。目録の著録と国立故宮博物院分類巻立てとの対照表を**表一**として掲げたので、参照されたい。

『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』（以下「王庸目録」と略称）では、（二七）～（三五）まで九種の『山西辺垣図』を著録する（**表一**参照）。これら九種の地図群に続いて記される提要は次のように述べる。長文にわたるが、本地図の基本的な成り立ちを知る上で不可欠な情報であるので、全文を下に引用し、併せて日本語訳を付すこととする。

右山西邊垣圖九種，二十二册，皆山西監察御史所進呈。東路及中路每册六頁，西路每册八頁。進呈御史姓名均見各圖綾皮面上。其綾面已失者，姓名遂亦無考。舊目多註明進呈年份，不知其何所依據。今據雍正山西通志職官志中清代之巡按山西監察御史：黄徽印（當即圖上之黄徽徹）於順治二年任，呂維檉於順治四年，劉漪於順治五年，蔡應桂亦於順治五年，白尚登於順治十五年任，大抵與舊目所記相合。惟蔡應桂在順治五年任御史，而舊目所記為六年；殆因蔡氏上任雖在五年，而其進呈此圖之時或在六年也。惟末一種封套雖記劉漪所進，而內中三册之封面均已失去，中路一册尤破爛不堪；且按其圖畫中所記堡墩名數，與第六種劉漪所進圖有不同處，與其他各圖亦多差異；疑此為順治七年至十四年間之某一年某御史所進呈；或此三路三册，本非一部，係錯亂配合，而將劉漪所呈之圖之封套，亦誤合一處耳。究竟如何，尚待校勘。又按白尚登所進圖，其西路綾封面已失，且東中二路每頁右上角所記墩臺總數，均作一二三等繁筆字，而西路則作普通簡筆字；故西路一册，疑非白尚登原圖，或雖係白氏之圖而另為一部；後人因其散失不全，強為配合耳。第一二兩種，內容圖式，大小體裁大致與其他諸圖相似，惟封面已失，不知為何人進呈，而所記各城堡墩臺名稱，皆係黑字，與以下順治間圖本之全用金字者不同。疑此即明代御史所進呈，以下諸圖，殆皆由此因襲。至於第二種黄綾邊者，舊京師圖書館原配入順治六年蔡應桂圖中，茲因其與第一種假定明末時之圖本相同，特為提出，故蔡應桂圖仍缺西路一册。

[日本語訳]

右の『山西辺垣図』九種、二二冊は、みな山西監察御史が進呈献上したもので、東路及び中路が毎冊六頁、西路は毎冊八頁、進呈者たる御史の姓名は均しく各図の綾表紙上に見える。綾表紙が失われている場合、姓名は手がかりが無いことになる。旧目録には、しばしば進呈年代が書かれているが、何に依拠するのかはわからない。いま、雍正年間の『山西通志』「職官志」によれば、清代の巡按山西監察御史には、黄徽印（即ち図上にある黄徽徹）が順治二年、

呂維樸が順治四年、劉漪が順治五年、蔡應桂もまた順治五年、白尚登が順治十五年に任官しており、概ね旧目録の記載に合致する。蔡應桂は順治五年に御史就任であるにもかかわらず旧目録が六年と記すのは、蔡氏の就任は五年であっても、図の進呈時期が順治六年になっていたことに因るのであろう。また、最後の一種の封套には、劉漪進呈である旨が記されてはいるが、三冊の表紙は已に失われ、中路の一冊はとりわけ破損状態が深刻で、しかもその図画中に記載される墩堡の名と数は、第六図の劉漪進呈図とは異なる部分を有し、他の諸図とも食い違いが多く見られる。疑うらくは、この図は、順治七年から十四年の間のいずれかの年に、いずれかの御史によって進呈されたものか、或いは、この三路三冊は本来同一組ではないにもかかわらず組み合わせが錯乱して、劉漪進呈図の封套で、誤って同一組に組み合わされてしまったのであろう。もともとどのようなものであったかは、今後の校勘を待たねばならない。白尚登の進呈した図では、西路部分の綾表紙が失われており、且つ東路と中路の二路図では、毎頁右上角に記す墩台総数を、すべて一二三の繁筆の数字（大写）で記すが、西路は普通の簡筆で記録する。故に、その西路一冊は本来白尚登の原図ではないか、もしくは白氏の図であっても別の一セットだったものであったのではないかと思われる。散逸して完全でない為に、後人が無理矢理一つに組み合わせてしまったのであろう。第一・二の二種類は、内容図式、大小の体裁、概ね他の諸図と類似しているが、ただ封面が失われて、誰の進呈図かわからない。しかし、記載される各城堡墩台名は全て黒字で、それ以降の順治年間図本が全て金字を用いているのとは異なっている。もしかすると、これは明代の御史が進呈したもので、それ以降の諸図はすべてこれ（明代御史進呈図）を踏襲したのではないかと思われる。第二番目の黄綾の縁取りが有るものは、旧京師図書館が、順治六年蔡應桂図の中に配しているが、これは、第一の明末時図本と仮定されるものと同じであるので別に掲出した。それ故に、蔡應桂図には、依然として西路一冊を缺く状態である。

表一　山西辺垣図の名称及び書誌情報の対照一覧

	No.	国立故宮博物院による巻数	山西邊垣圖（十八冊）(1)			
			国立北平図書館特蔵清内閣大庫輿図目録(2)の著録の名称及び書誌	国立故宮博物院所蔵現品の題箋に記載された標題	備考（国立故宮博物院による巻数（統一編号）。地図No.1、2、9には、現品に添付された付箋の記載を記す）	
1	巻十六		**山西邊垣圖**（西路） 一冊　彩絵　紗本　紅綾邊　黒字	標題を缺く	（西路）（020844） 紅綾邊西路〇〇　…以下缺	
2	巻十七		**山西邊垣圖**（西路） 一冊　彩絵　紗本　黄綾邊　黒字	標題を缺く	（西路）（020845） 山西鎮西路邊垣圖配蔡應桂雁門寧武兩冊〇三路全	
3	巻十三		**黄徽徹山西邊垣圖**（東中西三路） 三冊　彩絵　紗本　紅綾皮　金字 兼註満文　順治二年（一六四五）進	巡按山西監察御史臣黄徽徹謹畫完東路邊垣圖本（付満文標題）	（東路）（020841）	
	巻十四			巡按山西監察御史臣黄徽徹謹畫完中路邊垣圖本（付満文標題）	（中路）（020842）	
	巻十五			巡按山西監察御史臣黄徽徹謹畫完西路邊垣圖本（付満文標題）	（西路）（020843）	
4	巻十		**黄徽徹山西邊垣圖**（東中西三路） 三冊　彩絵　紗本　黄綾皮　金字 兼註満文　順治二年（一六四五）進	〇〇〇西監察御史臣黄徽徹謹〇〇〇西鎮三關邊垣圖三本（付満文標題）	（東路）（020838）	
	巻十一			巡按山西監察御史臣黄徽徹謹畫完中路邊垣圖本（付満文標題）	（中路）（020839）	
	巻十二			巡按山西監察御史臣黄徽徹謹畫完西路邊垣圖本（付満文標題）	（西路）（020840）	
5	巻七		**呂維檉山西邊垣圖**（東中西三路） 三冊　彩絵　紗本　黄綾皮　金字 順治四年（一六四七）進	巡按山西試監察御史臣呂維檉謹畫完東路邊垣圖説	（東路）（020835）	
	巻八			巡按山西試監察御史臣呂維檉謹畫完中路邊垣圖説	（中路）（020836）	
	巻九			巡按山西試監察御史臣呂維檉謹畫完西路邊垣圖説	（西路）（020837）	

6 (3)	巻二	劉漪山西邊垣圖（東中西三路）	巡按山西試監察御史臣劉漪謹畫完山西中路邊垣圖説（中路）（020830）
	巻三	三冊　彩絵　紗本　黄綾皮　金字 順治六年（一六四九）進	巡按山西試監察御史臣劉漪謹畫完山西西路邊垣圖説（西路）（020831）
7 (4)	巻一	蔡應桂山西邊垣圖（東中二路）	巡按山西監察御史臣蔡應桂謹畫完中路邊垣圖○（東路・東路・中路）（020828）
		二冊　彩絵　紗本　黄綾皮　金字 順治六年（一六四九）進	
8	巻四	白尚登山西邊垣圖（東中西三路）	巡按山西監察御史加壹級臣白尚登謹繪完鴈門關邊垣圖本壹冊（東路）（020832）
		三冊　彩絵　紗本　黄綾皮　金字	
	巻五	順治十五年（一六五八）進 西路無綾皮、疑配合	巡按山西監察御史加壹級臣白尚登謹繪完寧武關邊垣圖本壹冊（中路）（020833）
	巻六		標題を缺く（西路）（020834） 山西鎮西路邊垣圖配白尚登雁門寧武両冊○三路全

No.	山西三關邊垣圖（二十冊）(5)		
	国立北平図書館特蔵清内閣大庫輿図目録（注2）の著録の名称及び書誌	国立故宮博物院所蔵現品の題簽に記載された標題	備考（国立故宮博物院による巻数（統一編号）。地図No.1、2、9には、現品に添付された付簽の記載を記す）
9	山西邊垣圖（東中西三路雑配） 三冊　彩絵　紗本　黄綾皮　金字 破損配合 二十一年三月重裱　六頁　五月重裱　十頁	標題を缺く	

(1) 国立中央圖書館編輯『國立中央圖書館善本書目増訂本』（國立中央圖書館、一九六七年）には、「清初巡按山西監察御史蔡應桂等進呈絹本彩繪　五七×八五公分北平」と著録される（三三九頁）。

(2) 『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』（國立北平圖書館、一九三四年）八～一〇頁。内容については本稿四～五頁を参照のこと。

(3) (4) No.6の劉漪進呈図は、『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』には全三冊とあるが、国立故宮博物院の分類では巻二と巻三の二冊のみ。一方、No.7の蔡應桂進呈図は、『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』には二冊とあるが、国立故宮博物院の分類の巻一の分量は三冊分に相当する。

(5) 国立中央圖書館編輯『國立中央圖書館善本書目増訂本』（國立中央圖書館、一九六七年）には、「清初巡按山西監察御史劉漪進呈絹本彩繪　四六×七三、五公分北平」と著録される（三三九頁）。

上記提要中に登場する各監察御史が、巡按山西として任命されるのは、『清世祖実録』によるとそれぞれ、

黄徽徔　順治元年八月（巻七），呂維標　順治三年十月（巻二八），劉漪　順治四年十月（巻三四），

蔡應桂　順治五年十一月（巻四一），白尚登　順治十五年十月（巻一二一）

となり、『山西通志』（雍正十二年）「職官志」の記述にもほぼ一致する(3)。ただ、王庸目録が劉漪図進呈年を順治六年として著録するのは、彼の在任期間（順治四年から五年）を考えると、恐らく「五年」に改めるべきであろう。翌年末に着任した蔡應桂の進呈が六年であることも、それにより整合性が生まれる。

この王庸目録は、清内閣大庫所蔵当時の状況を伝えるものとして貴重な記事であるが、現蔵の国立故宮博物院による巻立てとの間には、若干の食い違いが生じていることに注意せねばならない。それは上にも言及した、劉漪と蔡應桂両者進呈図の分類についてである(4)。

王庸目録は、劉漪進呈図は「全三冊、東中西三路」を完備すると著録する（**表一**参照）。しかし、現蔵の国立故宮博物院の分類巻立てでは、この劉漪進呈図に相当する『山西辺垣図』は巻二「中路」と巻三「西路」の二冊のみで、本来有るべき「東路」該当冊をもたない。一方、王庸目録で「東中二路」二冊、「西路」を缺くとされる蔡應桂進呈図は、故宮の分類では『山西辺垣図』巻一に相当するのだが、実はその冊内には、「中路」の他に二セットの「東路」図が重複して収められ、「東東中」三冊分に相当する全十八帖の内部構成を見せている。同時に、この『山西辺垣図』巻一は、蔡應桂の名が記される封面とは別に裏表紙を備えているのだが、その裏表紙に配されるのは、本来は封面であったと覚しき題箋の剥落した綾皮であり、京師図書館（もしくは北平図書館）によるものと考えられる旧分類ラベルも添付されている。恐らくは重複する「東路」二種のどちらかの封面であったものが、題箋の剥落により誤って巻一の裏表紙に見なされたのであろう。この蔡應桂本の二つの「東路」のいずれかが、本来は劉漪進呈図に有って現蔵で失われている劉漪本「東路」だと推測されるのだが、具体的

にどちらが劉漪本で蔡應桂本であるかは、現段階では未詳とせざるを得ない。

以上の錯簡状況を整理すると次のようになる。

劉漪進呈図（全三冊）　故宮分類

東路　×

中路　巻二

西路　巻三

蔡應桂進呈図（二冊）　故宮分類

東路　巻一に二セット

中路　巻一

×　×

また、本学所蔵『布陣図』各図幅は青色縁綾絹（中廻し）で装幀されているが、故宮博物院蔵図の縁綾絹は、すべて黄色もしくは紅色である。この仕様の相違が、朝廷献上本とそれ以外のものとを区別するのか、それとも、王庸目録の他の山西省地図（大同鎮図等）で紙本が「青綾辺」、絹本が「紅綾辺」「黄綾辺」と区分される、そのような図幅の材質に対応するものかは不明であるが、図面に関しては故宮本と同じ由来により作成された地図であることは間違いない。本地図が、これらの順治二年から順治十五年に至る地図群（王庸目録はその一部に明末進呈の地図が含まれる可能性を示唆する）のどの描図様式により近似するかについての検討は、今後の課題としたい。

第二節　『布陣図』と『三関図説』との関連

本学所蔵『布陣図』は、朱・藍・緑・黄・金と、多彩な顔料により彩色される。その中でひときわ目を引くのが、主要な城関堡に塗られた鮮やかな朱色であるが、さらにそれは、或るものは藍色、或るものは黄色の城郭により縁取られている。この城郭の彩色が何を意味するのか、これまで確たる判断材料が見出されなかったのだが、今年度の故宮博物院における同

源流の『山西辺垣図』、また東洋文庫における文献調査によって、その選色基準を判断する手がかりを得ることができた。

国立故宮博物院所蔵地図の写真は、発色の効果が完全ではなく、大凡の色調を知ることはできても、写真によっては赤と茶、黄の区別や、藍と緑の区別が判然としないものも多数存在する。その為、各城関堡の色彩面での比較は、一部の比較的鮮明な写真を除けば慎重に進めざるを得ないのだが、その地図冊中に、極めて鮮明に色彩が判別できる城関堡が二つ存在した。それは、くすんだ色調の中に在って、まるで蛍光塗料が塗られたかのように鮮やかな白色の城郭で囲まれた、「利民堡」と「鵰窩梁堡」である。それ以外に、白い城郭で囲まれた大規模な城関堡は存在しない。

この事実を手がかりに『三関図説』（万暦三十五年序、康丕揚撰、東洋文庫・中央研究院傅斯年図書館蔵）の「利民堡」・「鵰窩梁堡」の記述を調べてみたところ、果たしてこの二堡は他の城関堡とは異なり、「石組み（石砌）」の城壁を有していたことが判明した。この二堡以外に、石組みの堡は文献上にも記録は見られない。その事実を手がかりに、改めて『三関図説』の記述と『布陣図』上の城郭に施された彩色とを対比させたところ、「甎包」と記される城堡は藍色、「土堡」であれば黄色という明白な対応関係がうかびあがった。つまり、城郭の藍・黄・白の色分けは、それぞれ、甎（瓦）・土・石という城郭の材質に対応していたのである。

本章末尾に掲げるのが、その色分けと『三関図説』での記述対照表である（**表二**）。

極く少数の非対応項目には▼を付しておいたが、これら▼における非対応も仔細に検討すると、太安嶺以外はすべて、『三関図説』では「土」と記されながら『布陣図』で「藍」となるもので、その逆は存在しない。これらは時間の経過により、『三関図説』成立後に「甎包」工事が施された結果を反映するものと考えられよう。事実、『布陣図』で藍色の城郭で縁取られる「白草溝堡」は、『三関図説』では「土堡」とされながらもその解説文中に「萬暦三十三年新議用甎石包修」（万暦三十三年に、甎石にて城壁を掩う工事を立案した）とあって、その藍色に塗られた城郭も、万暦三十三年以降の改築工事の結果を反映し

たと考えられるのだ。他の「『布陣図』藍～『三関図説』土堡」の非対応も、同様の時間経緯を反映すると考えることができよう。もちろん甎石（藍）から土（黄）への後退は有り得ない。「『布陣図』藍～『三関図説』土堡」に対して「『布陣図』黄～『三関図説』甎」という逆の例が存在しないのは、まさにその事実を物語る。ただ、それでも説明しきれない地点が一箇所見られる。それは「太安嶺」である。この堡は、『布陣図』黄～『三関図説』土堡として、綺麗な対応を示しているのだが、実は『三関図説』の絵図、太安嶺堡図の横に小字で「萬暦三十三年包完甎石」との注記が確認される。これが正しいとすると、『布陣図』は藍色に塗られていなければならない。にもかかわらず、なぜ本学『布陣図』では黄色表示（土包）のままなのか、現状では不明とせざるを得ない。今後、更に文献資料上の考証を進めて行きたいと考える。

表二　『布陣図』城郭の配色と『三関図説』に記される建材質との対照

※配色欄に（故宮）と注記したものは，故宮蔵地図により確認したもので，それ以外は京大蔵『布陣図』中の配色を示す。

城関堡名	配色	建材	甎包年	城関堡名	配色	建材	甎包年
東路							
平刑関	藍	甎堡	萬曆九年甎包	平刑嶺	藍	甎堡	萬曆十四年包
團城口	黄	土堡		▼太安嶺	黄	土堡	萬曆三十三年包完甎石
車道塲	黄	土堡		凌雲口	黄	土堡	
北樓城	藍	甎城	嘉靖二十三年甎包	大石口	黄	土堡	
小石口	藍	甎堡	萬曆二十年甎包	▼茹越口	藍	土堡	※萬曆三十五年以降に甎包か
▼馬蘭口	藍	土堡	※萬曆三十五年以降に甎包か	胡峪口	黄	土堡	
水峪口	黄	土堡		廣武城	藍	甎城	萬曆三年甎包
▼白草溝	藍	土堡	萬曆三十三年新議用甎石包修	八岔口	黄	土堡	
代州	藍	甎城		鴈門關	藍	甎城	
繁峙縣	藍	甎城		五臺縣	藍	甎城	萬曆三十一年甎包
崞縣	藍	甎城					
中路							
小蓮花	―	土包		盤道梁	―	甎堡	
夾柳樹	―	土堡		燕兒水	―	甎堡	萬曆十五年甎包
鵰窩梁	**白（故宮）**	**石堡**	**隆慶二年石砌**	朔寧	黄	土堡	
陽方口	―	甎堡	萬曆四年甎包	寧武關	藍	甎城	萬曆元年甎包
狗兒澗	―	土堡		寧化城	藍	甎城	萬曆十年甎包
圪老	―	土堡		神池	―	甎堡	萬曆四年甎包

石湖嶺	—	土堡	
得勝	—	土堡	
勒馬溝	—	土堡	
乾柴溝	—	土堡	
野豬溝	—	土堡	
忻州	—	甎城	萬曆二十三年甎石包修
靜樂縣	—	甎城	
西路			
賈家堡	藍	甎堡	萬曆十八年甎包
▼栢楊嶺	藍	土堡	
水泉營	藍	甎堡	萬曆三年甎包
草垛山	藍	甎堡	萬曆二十八年甎包
滑石澗	藍	甎堡	萬曆八年甎包
樺林	—	甎堡	萬曆二十九年甎包
韓家坪	藍	甎堡	萬曆十四年包
樓溝	藍	甎堡	萬曆十七年包
五塞堡	藍	甎堡	萬曆八年包
嵐縣	藍	甎城	萬曆五年包
樓子營	—	甎堡	萬曆五年甎包
唐家會	藍	甎堡	萬曆十年包
河曲縣	藍	甎城	萬曆十三年包
西溝口	—	土堡	
利民	**白（故宮）**	**石城**	**萬歷四年包砌**
蔣家峪	—	土堡	
八角城	—	甎城	萬曆十五年甎石包砌
長林	—	土堡	
定襄縣	—	甎城	萬曆三十一年甎包
老營	藍	甎堡	萬曆六年包
八柳樹	—	甎堡	萬曆十五年甎包
寺塢	藍	甎堡	萬曆十五年包修
黃龍池	藍	甎堡	萬曆二十九年甎包
偏頭關	藍	甎城	萬曆二年包
馬站	藍	甎堡	萬曆六年包砌
永興	藍	甎堡	萬曆十八年包修
三岔堡	藍	甎堡	萬曆九年包
岢嵐州	藍	甎城	
興縣	藍	甎城	隆慶三年包
河曲營	藍	甎城	萬曆七年包修
河會	藍	甎堡	萬曆三十年包修
保德州	藍	甎城	萬曆三十年甎包

第二章　『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』、『山西辺垣布陣図』の比較分析

第一節　『山西辺垣図』および『山西三関辺垣図』に描かれる空間範域

『山西辺垣図』の巻一から巻十七には一二八枚、『山西三関辺垣図』には二〇枚の図幅が含まれる。これら一四八枚の図幅を、ネガフィルム（カラー）から印刷したもの、および、写真（カラー）からコピーしたものを入手した（すべてモノクロ）。画像自体がそれほど鮮明ではない上に、モノクロ・コピーゆえに、本来の色調や濃淡の違いがわかりにくい。また、保存状態が良好とは言い難く、書き込まれた金泥文字が剥落したり薄くなったりしている箇所が多く、読み取りは極めて困難である。このため、確認できたわずかな文字情報の他、描かれた城や陣、地形等の形態や様相なども手がかりとして、『山西三関辺垣図』と『山西辺垣図』の一四八枚の図幅が、それぞれ、どこの地域のどの範囲を描いているのか特定する作業を行った。

まず、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』に含まれる十三枚の図幅と照合し、ほぼ同じ内容と確認できたものには、『布陣図』で採用したのと同じ図幅名を用いて識別することとした（注1）。その結果、城や堡などの位置や数、地形の様子、描写の仕方などで多少異なる点もあるが、『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』には、全部で二〇種類の図幅があること、これら二〇種類の図幅には、『山西辺垣布陣図』を構成する十三枚の図幅（「平刑」、「車道塲口」、「北樓」、「茹越・廣武」、「鴈門」、「白草溝」、「寧武」、「老營」、「水泉營」、「草垛山」、「偏關」、「河會」、「岢嵐」）と対応するものがすべて含まれていることが判明した。

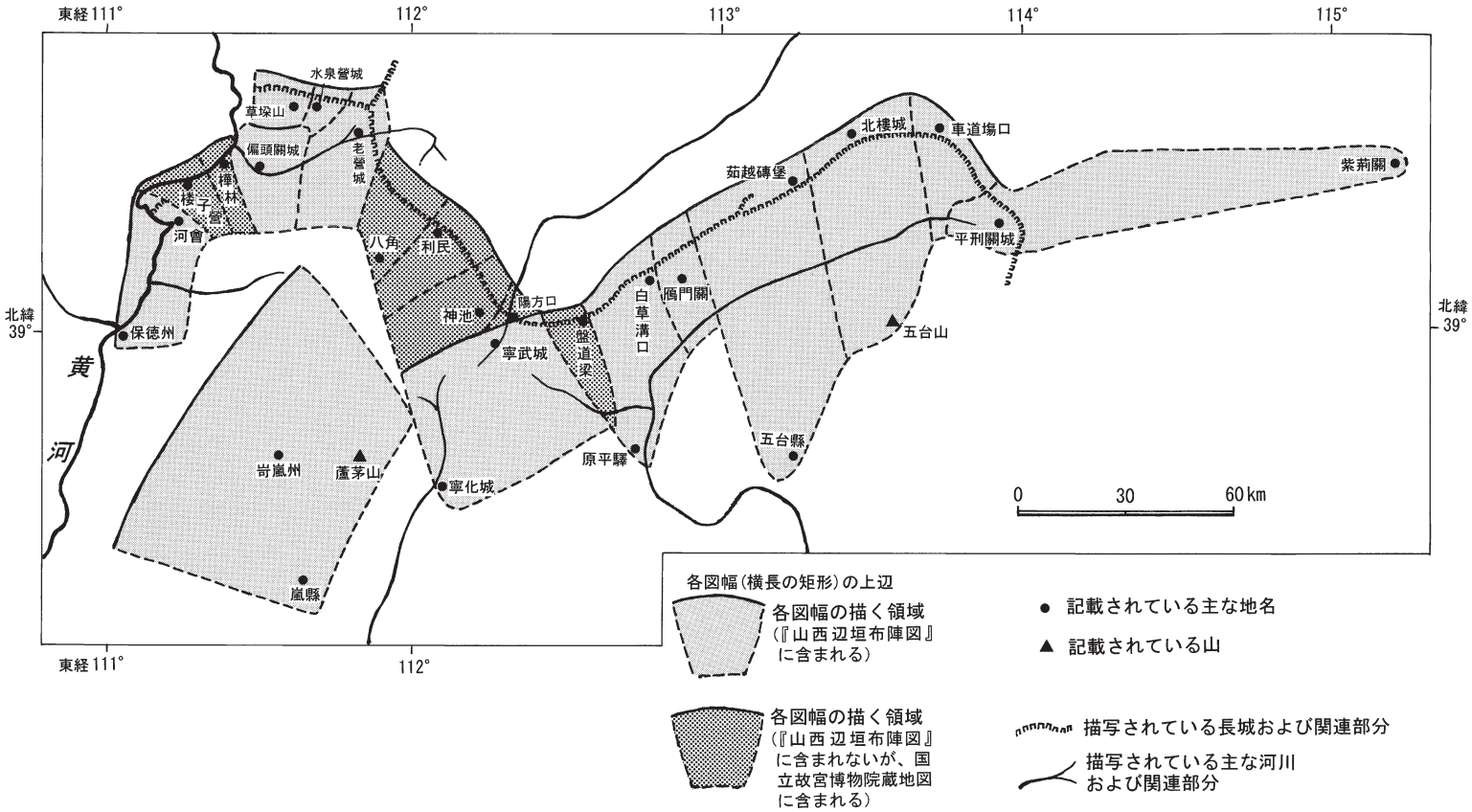
よって、国立故宮博物院の『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』にはあるが、京都大学蔵の『山西辺垣布陣図』にはないという図幅は七種類である。これらの図幅を、城壁などの形態が比較的詳細に描かれている『山西鎮総図』（明万暦三十一年）（一六〇三年）（5）および『山西辺関図』（乾隆十五年）（一七五〇）（6）、『三関図説』（明万暦三十五年）（一六〇七）（7）

に描かれた長城や城や陣の形態と配置、河川や山などの様相と照らし合わせて検討した。その結果、これら七種類の図幅は、長城をはさんで新旧の盤道梁堡が対置されている「盤道梁」、長城と河川の交差点の両岸に陽方口堡と円形の衛衝が置かれる「陽方口」、神池堡の城壁の西に大きな池がある「神池」、下部のふくらんだ壺形の白い城壁を持つ利民堡が描かれる「利民」、屈曲する長城に沿って数か所に陣が配置されている「長林」、黄河と黄河へ注ぐ支流に囲まれた樺林堡に隣接して支流をまたぐ衛衝が築かれている「樺林」、黄河中の二つの中州（小島）の所在が特徴的な「樓子營」と命名できる図幅であった。

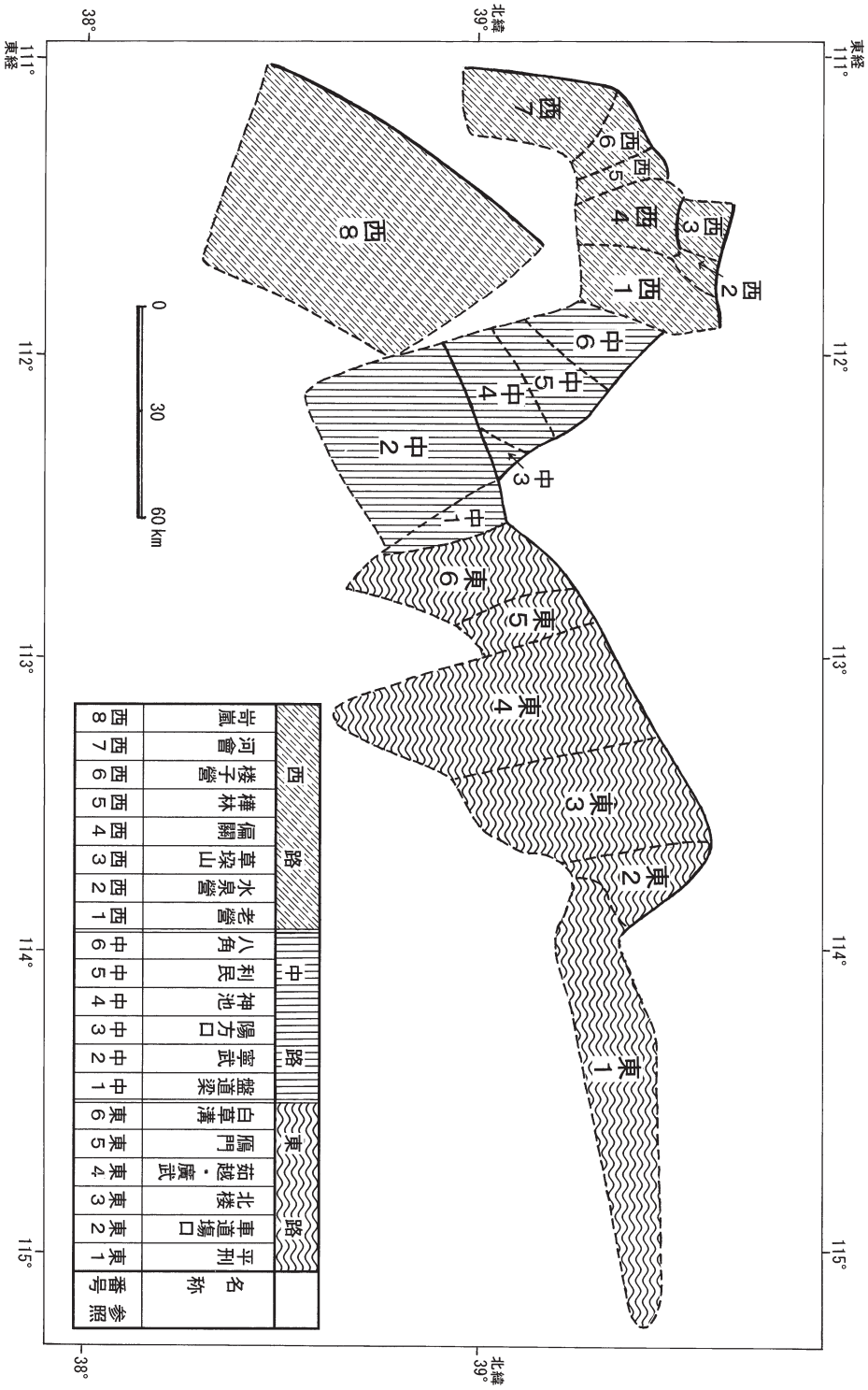
同一の種類の図幅であっても、それが描く領域が、『山西辺垣布陣図』と『山西三関辺垣図』と『山西辺垣図』の各巻に含まれる図幅との間で必ずしも一致するとは限らない可能性もある。けれども、各図幅が描く空間範域が長城に沿って、どのように配置されているかをまず確認しておく必要があろう。**図一**に、各図幅に描かれる主要な地名を記し、おおよその地理的領域を区分している。京都大学蔵『山西辺垣布陣図』に含まれる十三図幅が描く範囲と国立故宮博物院蔵の『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』から確認できた七図幅が描く範囲とを区別して示している。

全二〇種類の図幅によって、前稿（注1）で『山西辺垣布陣図』に含まれる図幅に欠落がある可能性を指摘した箇所（盤道梁と陽方口付近、および、中路沿いの一帯）の空白が埋まり、黄河に沿う地帯も連続して描かれることが明かになった。これらは、内長城の東路・中路・西路地帯を描く地図と言えよう。岢嵐州や嵐縣を描く「岢嵐」の領域は、長城から黄河沿いに描かれる地帯と連続する可能性もあるが、現在までの調査では確定できないため、前稿（注1）で示した範域のままとしている。

東路、中路、西路は、それぞれ、六図幅、六図幅、八図幅で描かれる。**図二**には、これら二〇の図幅の描く空間範域を東路・中路・西路に分けて、参照番号を付している。番号は、基本的に、東から西へという順番である。京都大学蔵『山西辺垣布陣図』に欠けているのは、参照番号では中1、中3～6、西5と西6で示される図幅である。



図一　京都大学蔵『山西辺垣布陣図』に描かれる領域と国立故宮博物院蔵の『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』に描かれる領域



図二　「山西辺垣図群」（二〇図幅）の描く領域と名称および参照番号

表三 国立故宮博物院蔵『山西辺垣図』・『山西三関辺垣図』および京都大学蔵『山西辺垣布陣図』の内部構成一覧表

進呈年代　不詳
（進呈者（不詳））

配列順序	『山西邊垣圖』巻十六	参照番号
一	老營	西1
二	水泉營	西2
三	草垛山	西3
四	偏關	西4
五	樺林	西5
六	樓子營	西6
七	河會	西7
八	岢嵐	西8

不詳
（不詳）

配列順序	『山西邊垣圖』巻十七	参照番号
一	老營	西1
二	水泉營	西2
三	草垛山	西3
四	偏關	西4
五	樺林	西5
六	樓子營	西6
七	河會	西7
八	岢嵐	西8

順治二年（一六四五）
（黄徽徫）

配列順序	『山西邊垣圖』巻十三	参照番号
一	平刑	東1
二	車道塲口	東2
三	北樓	東3
四	茹越・廣武	東4
五	鴈門	東5
六	白草溝	東6

配列順序	『山西邊垣圖』巻十四	参照番号
一	盤道梁	中1
二	寧武	中2
三	陽方口	中3
四	神池	中4
五	利民	中5
六	八角	中6

配列順序	『山西邊垣圖』巻十五	参照番号
一	老營	西1
二	水泉營	西2
三	草垛山	西3
四	偏關	西4
五	樺林	西5
六	樓子營	西6
七	河會	西7
八	岢嵐	西8

順治二年（一六四五）
（黄徽徫）

配列順序	『山西邊垣圖』巻十	参照番号
一	平刑	東1
二	車道塲口	東2
三	北樓	東3
四	茹越・廣武	東4
五	鴈門	東5
六	白草溝	東6

配列順序	『山西邊垣圖』巻十一	参照番号
一	盤道梁	中1
二	寧武	中2
三	陽方口	中3
四	神池	中4
五	利民	中5
六	八角	中6

配列順序	『山西邊垣圖』巻十二	参照番号
一	老營	西1
二	水泉營	西2
三	草垛山	西3
四	偏關	西4
五	樺林	西5
六	樓子營	西6
七	河會	西7
八	岢嵐	西8

順治四年（一六四七）
（呂維樓）

配列順序	『山西邊垣圖』巻七	参照番号
一	平刑	東1
二	車道塲口	東2
三	北樓	東3
四	茹越・廣武	東4
五	鴈門	東5
六	白草溝	東6

配列順序	『山西邊垣圖』巻八	参照番号
一	盤道梁	中1
二	寧武	中2
三	陽方口	中3
四	神池	中4
五	利民	中5
六	八角	中6

配列順序	『山西邊垣圖』巻九	参照番号
一	老營	西1
二	水泉營	西2
三	草垛山	西3
四	偏關	西4
五	樺林	西5
六	樓子營	西6
七	河會	西7
八	岢嵐	西8

順治六年（一六四九）
（劉漪）

配列順序	『山西邊垣圖』巻二	参照番号
一	盤道梁	中1
二	寧武	中2
三	陽方口	中3
四	神池	中4
五	利民	中5
六	八角	中6

配列順序	『山西邊垣圖』巻三	参照番号
一	老營	西1
二	水泉營	西2
三	草垛山	西3
四	偏關	西4
五	樺林	西5
六	樓子營	西6
七	河會	西7
八	岢嵐	西8

＊『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』には三冊とあるが、国立故宮博物院の分類では、巻二と巻三の二冊のみ。

順治六年（一六四九）
（蔡應桂）

配列順序	『山西邊垣圖』巻一	参照番号
一	盤道梁	中1
二	寧武	中2
三	陽方口	中3
四	神池	中4
五	利民	中5
六	八角	中6
七	白草溝	東6
八	鴈門	東5
九	茹越・廣武	東4
十	北樓	東3
十一	車道塲口	東2
十二	平刑	東1
十三	白草溝	東6
十四	鴈門	東5
十五	茹越・廣武	東4
十六	北樓	東3
十七	車道塲口	東2
十八	平刑	東1

＊『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』には二冊とあるが、巻一の分量は三冊分に相当する。

順治十五年（一六五八）
（白尚登）

配列順序	『山西邊垣圖』巻四	参照番号
一	平刑	東1
二	車道塲口	東2
三	北樓	東3
四	茹越・廣武	東4
五	鴈門	東5
六	白草溝	東6

配列順序	『山西邊垣圖』巻五	参照番号
一	盤道梁	中1
二	寧武	中2
三	陽方口	中3
四	神池	中4
五	利民	中5
六	八角	中6

配列順序	『山西邊垣圖』巻六	参照番号
一	老營	西1
二	水泉營	西2
三	草垛山	西3
四	偏關	西4
五	樺林	西5
六	樓子營	西6
七	河會	西7
八	岢嵐	西8

不詳
（不詳）

配列順序	『山西三關邊垣圖』	参照番号
一	鴈門	東5
二	利民	中5
三	八角	中6
四	草垛山	西3
五	偏關	西4
六	樺林	西5
七	樓子營	西6
八	神池	中4
九	陽方口	中3
十	寧武	中2
十一	盤道梁	中1
十二	河會	西7
十三	平刑	東1
十四	白草溝	東6
十五	茹越・廣武	東4
十六	北樓	東3
十七	老營	西1
十八	車道塲口	東2
十九	岢嵐	西8
二十	水泉營	西2

不詳
（不詳）

配列順序	『山西辺垣布陣図』（京都大学）	参照番号
一	寧武	中2
二	鴈門	東5
三	平刑	東1
四	茹越・廣武	東4
五	北樓	東3
六	車道塲口	東2
七	草垛山	西3
八	白草溝	東6
九	岢嵐	西8
十	水泉營	西2
十一	老營	西1
十二	河會	西8
十三	偏關	西4
＊	盤道梁	中1
＊	陽方口	中3
＊	神池	中4
＊	利民	中5
＊	八角	中6
＊	樺林	西5
＊	樓子營	西6

＊欠落

（注）『山西辺垣圖』の統一編号（巻数）は、国立故宮博物院による。進呈年代および進呈者は、『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』（國立北平圖書館、一九三四年）、八～一〇頁による。

第二節　『山西辺垣図』、『山西三関辺垣図』ならびに『山西辺垣布陣図』の内部構成

表三に、『山西三関辺垣図』と『山西辺垣図』の構成を示している。進呈年代と進呈者(8)に従って並べ、これらと比較するため、最下段には、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』の構成を配している。それぞれに含まれる図幅の配列順序とその図幅名、各図幅が描く空間範域の参照番号（**図二**）を示す。『山西三関辺垣図』の統一編号（巻数）も合わせて表記している（**表一**を参照されたい）。

『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』の巻一を除いて、巻二から巻十七までの各巻は、東路、中路、西路のいずれか一路を描いている。巻一には、中路が一組（六図幅）と東路が二組（六図幅＋六図幅）含まれる。『山西辺垣図』は、東路（六図幅）、中路（六図幅）および西路（八図幅）を一組ずつ含む。京都大学蔵『山西辺垣布陣図』には、東路、中路、西路すべての路の図幅が含まれるが、中路で五図幅、西路で二図幅を欠く。

巻二から巻十七のそれぞれを構成する図幅は、基本的に東から西へという順序で配列されており、**図二**の地図での参照番号とも対応する。これに対し、巻一では、中路が東路より先に配列され、その後に、東路の図幅が二組続く。これら二組とも、東路の図幅の配列順序は地図上の参照番号の順序に逆行している。東路が巻の最初に並ぶのが通常とすると、東路が二組あることを別にすれば、この巻は、路の配置が逆になり、さらに、東路の配列順が逆転しているとも考えられる。『山西三関辺垣図』と『山西辺垣布陣図』の図幅の配列順序は、東路、中路、西路という構成順序にも、各路内部での東から西へという順序にも合致しない。これらは、基本的な配列順序には合致しない図幅の並べ方で集成されている。

『山西辺垣図』の巻一～巻十七全体では、東路の図幅群は六組、中路は六組、西路は七組ある。東路・中路・西路を一セットとする組み合わせであるのは、黄徽亂が順治二年（一六四五）に進呈したとされる巻十三～十五と巻十～十二、呂維檉が

順治四年（一六四七）に進呈したとされる巻七～九、白尚登が順治十五年（一六五八）に進呈したとされる巻四～六の四つである。劉漪が順治六年（一六四九）に進呈したものに東路が欠け、同年、蔡應桂が進呈したものには東路が重複するが、西路が欠ける。巻一の重複する東路二組のうち、一組が本来は別の巻に属するものであった可能性は否定できない。また、順治二年（一六四五）から順治十五年（一六五八）までに進呈されたもの全体のなかにあるべき西路一組が不足していることについては、さらなる調査が必要である。

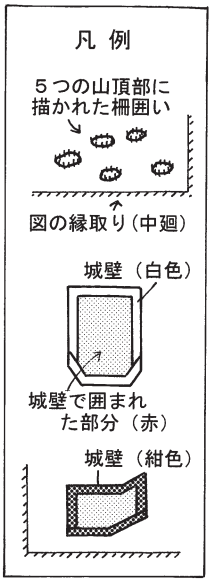
また、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』に欠けている七図幅がまとめられたと推測されるような巻や図の所在は、国立故宮博物院では確認されなかった。

図の大きさについてみると、『山西辺垣図』は五七×八五センチ(9)、『山西三関辺垣図』は四六×七三・五センチ(10)、京都大学蔵『布陣図』の図幅部分の大きさは四四・五×七〇・八センチである(注1)。後者二つの絵図の大きさは比較的近い。大きさの違いが何を意味するか、国立故宮博物院蔵の各図幅の縁（中廻）の布の色は紅もしくは黄、京都大学蔵の『布陣図』は紺という色の違いの意味とともに、今後解明すべき点である。

第三節　『山西辺垣図』、『山西三関辺垣図』ならびに『山西辺垣布陣図』における描図の検討

最後に、本章第一節で言及した、描図に多少の異同が見られることについて検討しておく。**表四**に、五臺山の位置、利民堡の形状、嵐縣の向きと位置について、それらが『山西辺垣図』、『山西三関辺垣図』、『山西辺垣布陣図』で、どのように描かれているのかを示す。五臺山、利民堡、嵐縣の図は、『山西鎮辺垣布陣図』については写真から、また、『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』については、国立故宮博物院で入手したモノクロ印刷あるいはコピーの図からトレースし、縮小したものである。

表四　『山西辺垣図』、『山西三関辺垣図』および『山西辺垣布陣図』における五臺山と利民堡と嵐縣の形態比較



進呈年代（不詳）	不詳	順治二年（一六四五）	順治二年（一六四五）	順治四年（一六四七）
五臺山の位置		『山西邊垣圖』巻十三 配列三（北樓）図左下	『山西邊垣圖』巻十 配列三（北樓）図左下	『山西邊垣圖』巻七 配列三（北樓）図左下
利民堡の形状		『山西邊垣圖』巻十四 配列五（利民）	『山西邊垣圖』巻十一 配列五（利民）	『山西邊垣圖』巻八 配列五（利民）
嵐縣の向きと位置	『山西邊垣圖』巻十七 配列八（岢嵐）図右下	『山西邊垣圖』巻十五 配列八（岢嵐）図右下	『山西邊垣圖』巻十二 配列八（岢嵐）図右下	『山西邊垣圖』巻九 配列八（岢嵐）図右下
	『山西邊垣圖』巻十六 配列八（岢嵐）図右下			

	順治六年（一六四九）	順治六年（一六四九）	順治十五年（一六五八）	不詳	不詳
山臺の位置	『山西邊垣圖』巻二 配列五（利民）	『山西邊垣圖』巻一 配列十五 配列十（北樓）（茹越・廣武） 図右下 図右下 配列五（利民）	『山西邊垣圖』巻四 配列三（北樓）図右下	『山西三關邊垣圖』 配列十六（北樓）図左下	『山西辺垣布陣図』（京都大学） 配列五（北樓）図左下
堡状民形の利	『山西邊垣圖』巻五 配列五（利民）		『山西邊垣圖』巻五 配列五（利民）	配列二（利民）	
き向の位置と縣嵐	『山西邊垣圖』巻三 配列八（岢嵐）図左下		『山西邊垣圖』巻六 配列八（岢嵐）図左下	配列十九（岢嵐）図左下	配列九（岢嵐）図左下

（注）『山西辺垣圖』の統一編号（巻数）は、国立故宮博物院による。進呈年代および進呈者は、『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』（國立北平圖書館、一九三四年）、八～一〇頁による。

五臺山は、巻十三と巻十（順治二年（一六四五）進呈）および巻七（順治四年（一六四七）進呈）では「北樓」図の左下に描かれているが、巻一（順治二年（一六四五）進呈）と巻四（順治十五年（一六五八）進呈）では図幅の右下に位置が変わる。ただし、巻一に含まれる二組の東路図のうちの一組では「北樓」（配列十）に、他の組では、地理的には「北樓」の西隣の「茹越・廣武」（配列十五）に五臺山が描かれている。『山西三関辺垣図』と『山西辺垣布陣図』では、五臺山は、「北樓」図幅の左下に描かれている。

利民堡は、他の城や堡と比べると、白壁と形が極めて特徴的な陣である。巻十四（順治二年（一六四五）進呈）から巻一（順治六年（一六四九）進呈）までは、下側の左右の角を斜めに切った形で城壁が描かれているが、巻四（順治十五年（一六五八）進呈）では、下部が六角形にふくらんだ壺のような形の城壁である。『山西三関辺垣図』でも同様の描かれ方である。

他の資料では、利民堡の城壁はどのように描かれているだろうか。「山西鎮総図」（『九辺図』明隆慶三年（一五六九））[11]では、長城は利民堡の上部に描かれ、左右に水平に延びる。利民堡の方形の城壁の東側の壁から台形状の極衝が突き出ている。利民堡と極衝の間には城壁があるが、全体を九〇度右回転して、外壁だけをたどると下部のふくらんだ壺形である。『山西鎮総図』（明万暦三十一年）（一六〇三年）[注5]でも下部が六角形にふくらんだ壺の形の城壁であるが、ふくらみは角張っておらず、曲線である。『三関図説』（明万暦三十五年）（一六〇七）[注7]は縦長の矩形の下辺を揺やかな曲線で描いている。『山西辺関図』（乾隆十五年）（一七五〇年）[注6]では、これと同じ形状に描いたものと、直線と曲線を組み合わせて描いたものとが示されている。なお、民国十一年（一九二二）測絵の五万分の一地形図「利民堡」[12]では、利民の城壁は北東方向に傾いた矩形である。

三番目の例は、嵐縣の向きと位置である。これも、巻十六から巻七（順治四年（一六四七）進呈）までは、左側の城壁が斜上を向き、「岢嵐」図の右下に描かれているが、巻三（順治六年（一六四九）進呈）から以降は、「岢嵐」図の左下に位置

が変わり、右側の城壁が斜上を向く。

五臺山の位置も、利民堡の形状も、嵐縣の向きと位置も、時代によって変化しているような印象を受けるが、安易な判断はできない。五臺山の位置の違いや特定の時点での位置転換があったかどうかを検討するに際しては、他の城や陣などとの相対的な関係や「北樓」と「茹越・廣武」との領域の区分、他の絵図資料や文献等での五臺山の描かれ方などについての分析が前提となろう。利民堡についても、城壁の改築が行われたのか、描き手が採用した描き方の問題なのか、描く際の丁寧さや詳しさの問題なのか、さまざまな解釈が可能である。嵐縣の例も、岢嵐州との相対的な関係と、「岢嵐」図幅そのものの向き、たとえば、黄河がどちらの方向に描かれているか、といった点を考慮しなければならない。

個々の事物の描写についての検討だけでなく、もし仮に、「山西辺垣図群」の原型にあたる図のようなものが存在した可能性があるならば、その原図からの写し方の多様さなのか、誤写なのかといったことも検討すべきであろう。考慮すべき要素は多いが、城や堡、山河などの地形描写を絵図の作成年代や作成方法などを特定するための手がかりとして用いることはできるのではないだろうか。

おわりに

国立故宮博物院での調査による収集資料を分析したところ、次の諸点を明らかにすることができた。まず第一に、国立故宮博物院には、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』に極めてよく似た内容の『山西辺垣図』および『山西三関辺垣図』が所蔵さ

れていること。これらを総称して「山西辺垣図群」と呼ぶとすると、この「山西辺垣図群」は三組（二〇図幅）で構成され、それぞれの組が描くのは、内長城の東路（六図幅）・中路（六図幅）・西路（八図幅）に沿う地帯であること。東路の六図幅、・中路の六図幅）、西路の八図幅は、各巻のなかでは、基本的に長城に沿って東から西へと配列されること。国立故宮博物院所蔵の「山西辺垣図群」に含まれる地図、合計一四八図幅、二十二組あること。京都大学蔵『山西辺垣布陣図』（十三図幅）に欠けていたのは、中路の五図幅と西路の二図幅であること。『山西辺垣布陣図』に欠けている七図幅がまとめられたと推測されるような巻や図の所在は、故宮博物院では確認されなかったこと、などである。また、故宮博物院の「山西辺垣図群」には白色の城郭が存在するのだが、それを『三関図説』の記載から考証した結果、白色が石造城郭であることが判明した。そのことが手がかりとなり、『山西辺垣布陣図』に見える藍色・黄色の配色が、甎包・土包に対応することが明らかとなった。

今回の調査と分析の最大の成果は、「山西辺垣図群」が国立故宮博物院と京都大学に所在することを確認したことである。こうした「山西辺垣図群」は、大きな規模の事業の一環として体系的に作成されていたと推測される。「山西辺垣図群」は、明末清初という時代に、どのような地域的・政治的・軍事的情勢を背景に、どのような目的で、どれくらいの頻度で、どれくらいの期間継続して作成されていたのか、どのような仕組みで作成され進呈されていたのだろうか。「山西辺垣図群」について究明すべき課題が極めて大きいものであることが、改めて認識させられる。

今後は、これまでの文献学、絵画論、地理学的な観点からのアプローチによる共同研究を継続し、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』および故宮博物院蔵の『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』について、文字情報や描図の解読と分析、長城を軸とする軍事防衛圏の空間構成と機能の分析といった研究課題に取り組むだけでなく、故宮博物院以外の諸機関での類品調査や山西省での長城地帯踏査による現地比定も実現させたい。

注

（1）田中和子・木津祐子・宇佐美文理（二〇一〇）「『山西鎮辺垣布陣図』（仮称）に関する地理学、文献学、絵画論的調査―予備的考察―」、京都大學文學部研究紀要、第四十九号、一～五三頁。

（2）李孝聡「中国古地図の再会―台北故宮博物院所蔵図の整理と考察―」、藤井譲治・杉山正明・金田章裕（編）『大地の肖像―絵図・地図が語る世界―』京都大学学術出版会、第二十章、四一〇～四二四頁。

（3）『山西通志』職官志では黄徽徳・呂維樫・劉漪の着任時期が一年づつ遅れるが、前年の任命を受け着任が翌年にかかるのは、必ずしも異とするには足りない。

（4）（注1）所携の李孝聡論文にも、王庸目録と国立故宮博物院蔵図との間に冊数の出入が有ることを指摘する（四一六頁）。

（5）『山西鎮總圖』第五～六冊（明萬暦三十一年刊本）（明）楊時寧編『宣大山西鎮總圖』三巻）（玄覧堂叢書第二〇～二五冊）。

（6）『寧武府志』十二巻（清魏元樞）乾隆十五年序刊本。

（7）『三關圖説』（明萬暦三十五年）。

（8）『國立北平圖書館特藏清内閣大庫輿圖目録』、國立北平圖書館刊、一九三四年、八～一〇頁。

（9）國立中央圖書館編輯『國立中央圖書館善本書目増訂本』（國立中央圖書館、一九六七年）には、「清初巡按山西監察御史　蔡應桂等進呈絹本彩繪　五七×八五公分　北平」と著録される（三三九頁）。

（10）國立中央圖書館編輯『國立中央圖書館善本書目増訂本』（國立中央圖書館、一九六七年）には、「清初巡按山西監察御史　劉漪進呈絹本彩繪四六×七三．五公分　北平」と著録される（三三九頁）。

（11）『九邊圖』（明隆慶三年）所収の「山西鎮總圖」および「山西鎮分圖」。

（12）五万分の一地形図「利民堡」（軍事委員會軍令部陸地測量總局）民国十一年測絵（台湾中央研究院所蔵）。

［付記］本研究には、（財）鹿島学術振興財団・平成二十一年度研究助成「『山西長城辺垣布陣図』（仮称）の研究と修復保存」（代表・宇佐美文理）の助成金を使用した。国立故宮博物院での調査に際しては図書文献処の盧雪燕先生に、中央研究院での調査に際しては歴史語言研究所の范毅軍先生ならびに人文社会科学研究中心の廖泫銘先生のご協力を得た。記して感謝申し上げます。

Comparative Study on Maps along the Great Wall in Shanxi 山西 Stored in National Palace Museum of Taiwan and in Kyoto University

Kazuko TANAKA and Yuko KIZU

Maps along the Great Wall in Shanxi stored in the National Palace Museum of Taiwan and the Kyoto University were compared and analyzed. This article makes it clear that: (1) the National Palace Museum owns two different Maps along the Great Wall in Shanxi, which are very similar to the Map stored in the Kyoto University. These maps are regarded to belong to a series of 'Maps along the Great Wall in Shanxi.' (2) A whole set of 'Map along the Great Wall in Shanxi' has three subsets of twenty sheets of maps: the first set (six maps) covers the geographical area along the east line of Great Wall, the second (six maps) covers the area along the central line, and the third (eight maps) covers the area along the west line. (3) In each set, maps are piled up basically from eastern map (top page) to western map (bottom page). (4) Two Maps in the National Palace Museum consist of twenty-two sets of 148 maps. (5) The Map stored in the Kyoto University, which has thirteen sheets of maps, does not have five maps along the central line and two maps along the west line. (6) The missing maps from the Map stored in the Kyoto University could not be found at the National Palace Museum. (7) White colored ramparts, which are made of stones, are drawn in the Maps stored in the National Palace Museum, but not in the Maps stored in the Kyoto University. (8) Significance of rampart colors is clarified: indigo-blue-colored ramparts are made of tiles, and light-brown-colored ramparts are made of mud.

國立故宮博物院所藏《山西邊垣圖》、《山西三關邊垣圖》與京都大學所藏《山西邊垣布陣圖》的比較研究

田　中　和　子　・　木　津　祐　子

根據台湾國立故宮博物院之調查，作者對所獲資料進行了分析，以下幾點已得到明確：（1）國立故宮博物院藏有與京都大學《山西邊垣布陣圖》來源一致的《山西邊垣圖》、《山西三關邊垣圖》，今將這些地圖（京大所藏地圖也包在內）統稱為“山西邊垣圖群”。（2）這些“山西邊垣圖群”一套總共該有二十幅圖，由三個部分所構成，各個分別表示山西鎮東路（計六幅圖）、中路（計六幅圖）、西路（計八幅圖）及其周邊地域，（3）大體沿“內長城”自東向西排列。（4）國立故宮博物院所藏的《山西邊垣圖》、《山西三關邊垣圖》，總計二十二套一百四十八幅圖；（5）京都大學所藏《山西邊垣布陣圖》（計十三幅圖）所缺損之圖為中路五幅和西路二幅圖。（6）然而在故宮博物院的地圖群中却不能發現可以互補京大所缺部份的多餘的七幅圖。（7）故宮博物院的“山西邊垣圖群”中有兩座城堡用白色顏料描繪的城郭，根據《三關圖說》中有關記載進行考證，這些白色果然是為了表示石砌包修的城郭配用的。（8）以此為線索而重新探討《三關圖說》記載，得知《山西邊垣布陣圖》中用藍、黃顏料彩色的城郭，分別表示甎、土包修的城郭。